

Title	<Chapter. 7>総括
Author(s)	河瀬, 彰宏
Citation	CIRAS discussion paper No.72 : 日本民謡の地域比較研究に向けて --西海道・山陰道・山陽道の地域性 = Toward Regional Comparative Study of Traditional Japanese Folk Songs: Regionality of Saikaid , San'ind and San'y d (2017), 72: 39-40
Issue Date	2017-03
URL	https://doi.org/10.14989/CIRASDP_72_39
Right	© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
Type	Research Paper
Textversion	publisher

Chapter. 7

総括

河瀬 彰宏

本研究ユニットでは、音楽文化の伝播と変遷を把握することを究極の目標とし、日本民謡の分析を実施した。本課題の先行研究にあたるKawase and Tokosumi (2010)では1,794曲の日本民謡を日本列島の各地域から選出し、地域ごとの音楽的特徴の使用傾向——厳密には小泉文夫氏が提唱した4種のテトラコルドを形成する音高推移パターンの出現確率——を多変量解析によって比較したところ、民俗学や方言地理学において取り上げられる東西二分論と限りなく一致する結果を得たものの、地域内での詳細な比較や、地域間の精緻な分析に至っていなかった。そこで、本研究ユニットでは、これまで課題として挙げていた分析データの拡張を行うことから始めた。全国的規模での詳細な楽曲分析を進めるために、九州地方(西海道)および中国地方(山陰道・山陽道)から収集された日本民謡を分析した。

図5.13と図6.14は、採録された楽譜の音高情報の集計であり、実際に歌い手が発声した絶対音高ではない。そのため、採譜当時に支持されていた陰音階・陽音階の区分で集計した場合に限定した考察とならざるを得ないが、両地方の比較からは、九州地方よりも中国地方の旋律の方が採譜時にD音の使用回数・持続時間の数値が圧倒的に高いこと、 $\#D/bE$ 音と $\#G/bA$ 音の使用回数・持続時間の数値も高いことが分かった。

図5.25と図6.27は、音程情報の集計結果であり、一見すると九州地方と中国地方における1音1音の使用傾向には違いがないように思える。しかし、図5.26と図6.28のように上行する音程と下行する音程を合計し、その累積度数を比較すると差異が明確に現れた。九州地方と中国地方では、これまでの学説を踏襲するように、完全4度(± 5)よりも狭い音程を用いた旋律が組み立てている傾向を裏付ける結果を得た。しかし、両者の音楽的特徴は、短2度(± 1)から長2度(± 2)にかけての勾配の違いが示すように、短2度音程の使用傾向の違いにあることが分かった。この様子は、具体的に小泉氏のテトラコルドの形成パターンや

東川氏の音階論の集計結果に関係していく。

表5.2と表6.2は、小泉氏のテトラコルドを形成するbigramの集計結果であり、すべての推移パターンが確認された。テトラコルドごとの割合を算出すると、九州地方では、民謡49.07%、都節8.69%、律37.57%、琉球4.67%であり、中国地方では、民謡50.70%、都節4.70%、律42.03%、琉球2.57%であった。この結果から、両地方での民謡のテトラコルドの使用頻度はテトラコルドの中ではほぼ同程度であるが、都節のテトラコルドと琉球のテトラコルドについては九州地方の方が倍近くも使う傾向が確認された。都の音楽の旋律に多用される都節のテトラコルドが中国地方よりも九州地方から多く集計され、細かい推移では、琉球のテトラコルドの上行形と下行形の使用頻度に大きな違いがあり、九州地方では少なからず南の地域の音楽の影響が記録されていることを確認した。

表5.3と表6.3は、東川氏の音階論の集計結果であり、全体的に陽類に集中しており、琉球類はほとんど出現しないことが確認された。ただし、ここには5音に満たない楽曲を含めていないことに注意されたい。類ごとの割合を算出すると、九州地方では、陽類84.94%、陰類13.00%、混合類1.93%、琉球類0.13%であり、中国地方では、陽類92.46%、陰類5.84%、混合類1.70%、琉球類0.00%であった。集計に用いた資料は違うものの、東川(2007)における町田佳聲・浅野健二編『わらべうた 日本の伝承童謡』(1961 岩波文庫)と町田佳聲・浅野健二編『日本民謡集』(1960年 岩波文庫)に収録されている251曲の分類結果——陽類198曲(78.88%)、陰類43曲(17.13%)、混合類7曲(2.79%)、琉球類3曲(1.20%)——と比較すると、両地方の類の集計結果は、東川氏の報告よりも陽類の割合が高く、残りの3類が少ないことになる。

日本の各種音階論と照らし合わせてみると、九州地方では、呂音階7.08%、陽類上行形23.29%、陽類下行形(=律音階)20.21%、民謡音階23.68%、陰音階上行形0.64%、陰音階下行形(=都節音階)8.37%、琉球

音階0.13%という割合になる。中国地方では、呂音階6.08%、陽類上行形33.70%、陽類下行形(=律音階)16.06%、民謡音階23.97%、陰音階上行形0.61%、陰音階下行形(=都節音階)3.77%、琉球音階0.00%という割合であった。

以上の通り、本研究ユニットでは、九州地方・中国地方の民謡に関する音楽的特徴を定量的に示し、楽曲情報と採録地域情報を相互参照可能な音楽コーパスと、ここから抽出される地域間の差異を示す特徴量を得たことを報告する。

本ペーパーの冒頭において、音楽学者の小泉文夫氏が記した民謡研究に関する基本姿勢——民謡は、文芸学、民俗学、音楽学の3つの側面から総合的に把握されるべきものであること——(小泉 1958)を紹介した。本研究ユニットでは、時間と予算の関係により、3つの側面のうち音楽学側のみを追究した研究事例となってしまったことが心残りである。本ペーパーにおいて示した研究の指針や実施した分析手法は、日本の他の地域の楽曲だけでなく、日本と隣接する諸外国の楽曲分析にも汎用的に実施できることは、日本民謡と中国民謡、ドイツ民謡との比較研究(Kawase 2012)においても実証されている。そこで、今後は九州地方・中国地方に限らず残りの地域の全楽曲の分析と、諸外国の楽曲に内在する音楽的特徴——例えば、チェコ民謡(Thořová 2011)に関する電子データ化は完了しているため着手可能である——との比較研究を進めていくことを目指す。

Homolky, Praha: Etnologický ústav AVČR, vol. 1.

- 東川清一(2007)『《君が代》考』。春秋社。

参考文献

- Kawase, Akihiro and Akifumi Tokosumi (2010), “Regional Classification of Japanese Folk Songs: Classification Using Cluster Analysis,” *Kansei Engineering International Journal* 10 (1), pp.19-27.
- Kawase, Akihiro (2012), “Extracting the Musical Schema from Traditional Japanese, Chinese and German Folk Songs,” *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, p.2720.
- 小泉文夫(1958)『日本伝統音楽の研究I』。音楽之友社。
- Thořová, Věra, Jiří Traxler, and Zdeněk Vejvoda (2011), *Lidové písně z Prahy ve sbírce Františka*